

図書名 蜜蜂と遠雷 著者名 恩田陸 出版社 幻冬舎

印象的な翠緑の装丁をめくると、目に入るのは多くの曲目。舞台は近年評価が目覚ましい芳ヶ江国際ピアノコンクール。そこに各様の思いを抱えて挑む四人の天才がいた。音楽を教えてくれた母を幼い頃に亡くし、ピアノから離れていた栄伝亜夜。自ら作曲家となり、新たな風を吹き込みたいマサル。現在の音楽家の在り方に疑問を抱く会社員、高島明石。そして、伝説的音楽家ホフマンから唯一、師事を許された少年、風間塵。そんなベクトルの異なる天才達が大会を通じて共鳴し、音楽家としての自分と向きあっていく物語である。

通常、音楽とは多様な解釈がなされるものである。例えば、人によって好きと嫌いか分かれるように。だが、本書で体験する音楽は一味違う。個人の好みには一切関係なく、全編を通して心痺れる仕掛けがあるのだ。そしてその工夫は、まさに「言葉」で音楽を紡いでいく所にあつた。作者は、天才らが内包する際限ない美を情景として綴る。そうして、

彼らの異才さをリズムカルに描いていった。更に、この体験をより鮮烈なものに昇華させる存在として、四人を取り巻く二十数名もの人物は欠かせない。審査員をはじめとする音楽関係者や親友、そして家族。彼らの広く、深い視線による評価は、奏者の人間像をより一層照らし、音楽を彩っていく。濃密な行き交いを繰り返すなかで、爆発的進化を遂げていく彼らの姿にこそ、音楽の本質があつた。

読み終えて本を閉じ、通学中の電車内を見渡す。目に入るのは自分だけの音楽に耳傾ける学生達。確かに手軽で、心温まる楽しみだ。だが、音楽を持ち歩けなかつた時代の娯楽は何であつたか。そう、読書だ。本を読むことで生じる多幸感とは音楽のそれと似ている。あなたも音楽を聴いて楽しむだけでなく、音楽を「読む」という体験を通して、ひと味違った快感に心震わせてみてはいかかだろうか。

「お礼を言わなくちゃ。音楽に満ちた世界に。そして、世界に満ちている音楽に。」